

人類と自然との共存に向けて ～日本人が果たすべき役割とは～

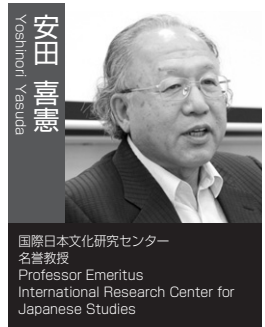
Toward the Coexistence of Humans and Nature: What Is the Role of Japan?

三菱UFJリサーチ&コンサルティングでは、2010年度より、弊社の研究員およびコンサルタントの基礎的教養を高め、クライアントに対してより魅力的で洞察力のある知恵の提供ができるようになることを目的に、「学び」の場として『巖流塾』を開催しています。

この目的を達成するため、『巖流塾』では表面的な知識やスキルを習得する場所としてではなく、物事の実体、本質に迫ることができるようなテーマを用意し、自己鍛錬、塾生同士の相互研鑽の場を提供することを目指しています。

2013年度においては、『巖流塾』の活動テーマを『100年後の日本～縮小国家・日本に将来はあるか～』と設定し、急速な高齢化の進展、人口減少社会の到来が確実視されるなかで、100年後の日本の姿を想定し、どのようなパラダイムの転換が必要か、日本がとるべき戦略・政策とは何か、等について構想していくことを目指しています。

そして、外部から有識者を講師としてお招きして、有識者の方々とのディスカッションを軸に、あるべき日本の姿についての検討を進めることとしています。お招きする有識者の第6弾として、国際日本文化研究センター名誉教授 安田 喜憲氏に、「人類と自然との共存に向けて～日本人が果たすべき役割とは～」と題した講義をお願いいたしましたので、ここに講義録を採録いたします。



Since 2010, Mitsubishi UFJ Research and Consulting has offered the company's researchers and consultants learning opportunities through the Ganryu Seminar to enhance their basic knowledge and enable them to provide interesting and insightful ideas to clients. To achieve this goal, the Ganryu Seminar is intended to be not merely a place for acquiring superficial knowledge or skills, but also a place where the participants can learn from each other as well as train themselves by engaging in themes that are connected to the reality and essence of issues.

In 2013, the theme for the Ganryu Seminar is "Japan in 100 Years: Does Our Shrinking Nation Have a Future?" With the country gripped by rapid population aging and population decline, the goal of the seminar is to imagine the situations that Japan will face 100 years from now and to discuss ideas regarding, for example, what kinds of paradigm shifts will be necessary and what strategies and policies should be pursued over this period. Experts from outside the company have been invited to lecture, and the seminar participants can further their ideas about an ideal Japan through discussions with them.

Included in this issue of the journal is content from a lecture entitled "A Summary of Toward the Coexistence of Humans and Nature: What Is the Role of Japan?" given by Yoshinori Yasuda, Professor Emeritus at the International Research Center for Japanese Studies, the sixth invited lecturer at the Seminar.

Part1：講義

リーダーになるために

私が企業と関係しているのは、京セラという企業の監査役をやらせていただいていることです。私は会計法等について素人ですので、「そんな私が監査役をやれるのでしょうか」と会長の稲盛先生に尋ねたら、何とおっしゃったかという「いいんだよ、それで。お前は人としての良心を語ればいいんだ」とおっしゃったのです。それならできるのではないかと考えてお引き受けしたのです。結局のところ経営の基本はやはり「人」なのです。

御社でも「リーダーシップ」に関するゼミナールをいろいろと開催されているようです。でもリーダーシップについて教えられたからといって、突然リーダーができるというものではないのです。人柄や人格の形成は一長一短にできるものではないのです。人格というものをアウフヘーベンして、魅力ある人間になるためには何をしなければいけないのかというと、ハウツーを勉強しても絶対それは分からないのです。結局、最終的にはそれはやはりその人の持っている人柄ということになるのです。

そのためには、中谷巖先生がおっしゃるように教養を積み重ねなければいけないのです。幅広い知識と人格形成とを行っただけで初めて、偉大なリーダーになれるのです。ハウツーを勉強すればリーダーになれるなどと思って、あちこちでビジネススクールが花盛りでやっているけれど、それは短期的にはいいかもしれないけれど、もっと長い目で見たらそれではだめだと僕は思います。だから幅広い教養をきちんと身につけて、その上に立ってリーダーシップを磨いていくことが大事だと思います。

さて、きょうは3つの話をしたいと思います。ひとつは富士山の世界遺産について、そして山を崇拝するというその気持ちについてです。富士山が世界遺産になりましたので、それを契機にこのお話をしたいと思います。これからはグローバルの時代ですから、世界と仲よくしていかなくてははいけません。中国や韓国とも仲よくしな

くてはいけないし、東南アジア、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ等、いろいろな国と仲よくしていかなければいけないわけですが、特にその中でわれわれが心を許せる仲間というのはどういう人々がいるのかということです。それは、山を崇拝するような心を持った仲間です。このような山を崇拝する、山を聖なるものと思うような人がどこにいるのかという話をしたいと思います。

2つ目は、われわれの持っている世界観、日本人としての生き方、ライフスタイルについてです。これが21世紀の未来にどんな社会をつくっていくかということです。さらにはわれわれ日本人というものは一体何者かということについてです。

そして3つ目は、東日本大震災に関連する話です。実は宮城県に大きな堤防がつくれるのです。私は社団法人全国日本学士会が発行している「ACADEMIA」という雑誌にその反論を書いています。世の中はそう甘くなくて、私が今ここで申し上げた、あるいは中谷先生が理想とされているような世界の方向には、世の中は必ずしも動いていないわけです。むしろ逆方向に動いています。本日はこういう話をして、皆さんとディスカッションさせてもらいたいと思います。

命の水の循環

まず1番目、山を崇拝するという気持ちについてです。今回、富士山が世界文化遺産に登録されました。実は静岡県の川勝平太知事と私は、国際日本文化研究センターのときの同僚だったのです。私と川勝知事が副所長で、宗教学者の山折哲雄先生が所長でした。

僕は、東北大学の学生時代の仙台での体験があまりにもよかったものですから、今般の大震災前に名取市のゆりが丘というところに家をつくっていたのです。名取市の^{ゆりあげ}の関上は津波でやられたのですけれども、僕の家は高台だったから大事はなかったのです。定年退職後、その家に帰ることにしていたら、東北大学から来ないかと誘われて、今は静岡県に1週間に1回行っているのです。そして、静岡県から与えられた仕事が、富士山を世界遺産に



するという仕事でした。

ユネスコにはイコモス（International Council on Monuments and Sites、略称：ICOMOS）という下部組織があって、それが富士山を世界遺産にするかどうかということを審査するわけです。そして、イコモスの勧告が今年の4月30日に来たのです。そこに何て書いてあったかという、「富士山を世界遺産にします。しかし条件がある。それは三保松原を外すことです。三保松原を外すことが、富士山を世界遺産にする条件ですよ」ということでした。「三保松原を外せば、世界遺産になる」ということで、周りの人は喜んだわけですよ。しかし、僕と川勝知事は、「何がうれしいのだ。三保松原を外して、何が富士山だ」と思いました。

ところで、富士山は山梨県と静岡県の間県にまたがっているでしょう。だから山梨県と静岡県が歩調を合わせることが難しかった。というのは、山梨県側から富士山にもすごい観光客が行っているのです。本栖湖とか山中湖とか、あの辺は観光開発が進んでいる。イコモスの人を現地に案内したときに、湖の真ん中に富士山みたいなものがあるわけですよ。「これは何だ」と言ったら、実は水上スキーのジャンプ台だったですよ。その時はびっくりしました。

そんなこともあって、ともかく山梨県は富士山で金もうけをしているわけですが、それにもかかわらず、富士山を世界遺産することに対して山梨県サイドは反対するわけですよ。富士山を世界遺産に申請するためには、地

元の自治体の首長の印鑑が要るわけです。静岡県側は全部集まったのですが、それが締め切りまじかになっても、山梨県側は全然集まってこない。僕は副委員長として心配しました。結局、山梨県サイドの委員長が必死になって集めてきて、それでやっと申請することができたのです。

そんな苦労の結果、イコモスから「世界遺産に採択します」という勧告が来たわけです。ところが、「三保松原を外すことが条件だ」ときた。それで僕と川勝知事は、「これはまだ8合目ぐらいまでだな。世界遺産登録という頂上まで、あと2合目ある」と思ったのです。

そして、イコモスからの条件には何て書いてあったかというと、「富士山の山岳信仰の源泉と芸術の対象を中心に、文化遺産として申請しなさい」と言ってきたわけです。けれども、その信仰と芸術の「信仰」の英語表現を見てびっくりしました。山岳信仰はPilgrims Route（ピルグリム・ルート）と表現されていました。ピルグリムってご存じでしょう？ 「巡礼者」という意味です。

富士山の三保松原がなぜいけないかというと、「ピルグリムルートから45kmも離れているからだ」とイコモスと言うわけです。しかし三保松原と富士山は一体なのです。天女は富士山の化身でしょう。それをつないでいるのは命の水の循環なのです。森里海の水の循環によって、富士山に降った雨は水田を潤して、それが駿河湾まで流れていくわけです。そのシンボルが三保松原と富士山の関係なのです。だからわれわれ日本人にとっては、富士山と三保松原というのは一体なのです。命の水の循環によってつながっている。ピルグリムルートから45km離れているから世界遺産から外すということなど、許せるわけがない。だから僕はもうこれは戦わなければいけないと思ったわけです。

三保松原とアンコールワット

世界遺産の最終の会議は、ユネスコの第37回総会で決まることになりました。その会議が、6月22日にカンボジアで開催される。その会議の議長はカンボジアのソク

アン副首相となりましたが、その名前を見て、僕はびっくりしました。実は僕は2006年からカンボジアのクメール文明に関する学術調査をしています。2006年にカンボジアに行ったところは、カンボジアはまだ貧しくて、ソクアンさんの家にも遊びに行ったことがあるわけです。2006年当時はまだ彼もそんなに立派な家に住んでいるわけではなかったから、スーッと遊びに行くことができたのです。

また、僕らの調査のカウンターパートはカンボジアの文化副大臣だったのです。ふつうは、日本からの学術調査のカウンターパートに副大臣になることはあり得ないでしょう。ところが、僕らの調査では、文化副大臣のチップン閣下だったのです。そして、彼がカンボジアの世界遺産に関する責任者だったのです。そういうわけですから、これはもう僕が何かやらなければいけないと思い、ソクアン副首相とチップン閣下に2回ずつ手紙を書いたわけです。

みなさん、アンコールワットを知っているでしょう。アンコールワットは世界遺産です。アンコールワットはどうしてできたかという、その東側にブノンバケンという山がある。その山に磐座いわくらがあって、その磐座からきれいな水が流れてくるわけです。その水をアンコールトムとアンコールワットの環濠に引いてきているわけです。アンコールワットの隣にアンコールトムという、12世紀の段階では世界一人口密度の高い都市があった。だから、この環濠の水はものすごく汚れているだろうと思って分析した。珪藻分析とか、昆虫の化石とか、寄生虫の卵なんかを環濠の土の中から取り出して分析した。そうしたら、昆虫の化石を分析している森勇一先生が、「先生、この水は飲めますよ」と言ったのです。12世紀の段階で世界一人口の多いアンコールトムの環濠の水は飲めるぐらいにきれいだったわけですよ。それを聞いて僕はもうびっくりしましたね。

なぜきれいなのかというと、アンコールトムの都市からの排水は、3つの大きな貯水池で全部ろ過しているわけです。その貯水池は今も残っています。そしてきれい

な上澄みだけを環濠に流していたのです。だから当時、おそらく今よりもきれいな水がアンコールワットとアンコールトムの環濠にはあったわけです。

その水はブノンバケンという山から流れてくるわけです。王様は毎年そのブノンバケン山に、1年に1回は必ず巡礼に行ったのです。だからブノンバケン山とアンコールワットの関係は、富士山と三保松原の関係と同じわけです。富士山から流れてくるきれいな水が駿河湾に流れて行って、その駿河湾の海岸に美しい三保松原がある。天女は富士山の化身です。富士山と三保松原の関係は、ブノンバケン山とアンコールワットの関係と同じなのです。また、アンコールワットの真ん中に「夕日を見る丘」というのがあるのですが、それは山のシンボルなのです。カンボジアの人々は山を崇拜しているわけです。

ところで、カンボジアにも「シロアリの巣」があるのです。日本人は、こんなものが家の中にできたらすぐに壊すじゃないですか。ところが、カンボジアの人はこれを壊さないのです。なぜならば、「シロアリの巣ができれば、幸せになれる」と信じて残しているのです。シロアリの巣が山のシンボルだからです。カンボジアは大平原が広がっていますから、その平原の中にポコンとあるシロアリの巣は山のシンボルなのです。それぐらい山を崇拜しているわけです。

それで僕はソクアン副首相とチップン閣下に、「アンコールワットとブノンバケン山の関係は富士山と三保松原の関係と同じなのだ」という手紙を書きました。そして、「これは西洋と東洋の対決だ」とも書きました。西洋人は山と海が水の循環でつながっているという発想はまったくありません。西洋人にとって川というのは、物資を運ぶ水運の交通路です。川は水運、すなわち物を運ぶ通路ではあるけれども、森里海の水の循環によって人の命がつながり、生きとし生けるものの命がつながり、山と海がつながっているという発想は西洋人にはまったくないわけです。そのような発想があるのは稲作漁撈社会なのです。お米をつくるためには水が要ります。その水は山から来ます。山から流れてくる水は水田を潤して、水

田を潤した水は海へ流れて行って、プランクトンを育てて魚を育てるわけです。そして、その魚を人間はたんぱく質として食べるのです。われわれはこういうライフスタイルをすごしているのです。ですから、富士山と三保松原、プノンパケン山とアンコールワットは聖なる命の水の循環によってつながっているわけです。

富士山と三保松原が世界遺産に

カンボジアの人は、日本人と基本的に同じ世界観だから、すぐに分かるのです。でも、世界遺産という制度は一神教の世界の人々がつくったものだから、そういう感性はなかなか理解されない。だから、「ピルグリムルートから45kmも離れているので、世界遺産にはしない」と平気で言えるわけです。日本人としては、そんなことを「はい」とは認められないでしょう。絶対認められないと思ったので、僕と川勝知事は「最後まで戦う」と言ったのです。

ところが周りの人はみんな、「先生、世界遺産になれるのだから、あまり余計なことは言わない方がいいのではないですか」とか「安田先生、気持ちは分かるけど、これで富士山まで全部再検討になったら、先生はもう日本に帰れませんよ」とか言うのです。三保松原のために富士山が再検討になったらえらいことだし、これはどうしようかと思ったけれども、ここで引き下がれないと思った。

僕と川勝知事が最初はどのような戦術を考えたかというと、「いかに水の循環が重要か」という話を会場でとうとうと話そうと思ったわけです。ところが、ユネスコの会議は普通では1,500人ぐらいの規模で開催されるわけです。各国の大使が大体5～6人の侍従を連れてきているわけでしょう。それにプラスアルファで関係者が来ているから、各国で大体10人ぐらい来ているわけです。それにカンボジアの関係者とかいろいろな人がいるから、会場は1,500人ぐらいいるわけです。そのような会場で、日本の三保松原がいかに重要かということをととうと云っても、これは理解されるかなあと、言えは言うほど

だめなのではないか、と考えました。

実際に会議の運営を見ていると、まずイコモスが「ここを世界遺産にしましょう」というように提案するわけです。そうするとみんな「OK、コングラチュレーション」とか言って、すぐに決まっていくわけです。逆に長い案件は再検討になってしまうのです。フィリピンの候補はこうして議論していくうちに再検討になってしまいました。

僕が「このまま行ったらこれはあかんかな。これはどうしたらいいかな」と思っていたときに、近藤文化庁長官（当時）や文化庁の担当者は「絶対に頑張る」と言ってくれたのです。

チップン閣下と川勝知事と食事会をしたのですが、そのときの彼の反応から、「これはひょっとしたらうまくいくかもしれないな」と思ったのです。もっとも彼は、「イコモスの決定はなかなか覆せない」とも言っていたのですが、川勝知事が「チャレンジしてもいいか」と尋ねたら、「いや、それはやめた方がいい」とも言っていました。

ところが21日の夜、午後7時から7時半の間の晩餐会が終わった後、たまたま近藤長官と会ったときに、長官の顔が明るく、にこにこ輝いておったわけです。「あ、これはうまくいくかもしれないな」と僕は思いました。

そして、翌日の22日の午後2時半から会議が始まりました。静岡県出身の遠山敦子氏（元・文科大臣）が「どこかの大使が三保松原が素晴らしいと言ってくれないかな」とおっしゃっていました。すると、その会議が始まったら、県庁の方が、「富士山の神さんが会場に来たんですか」と言ったぐらい、会場の雰囲気が一変したのです。まずドイツ大使が「三保松原は素晴らしい」と言ったわけです。そうしたらメキシコ大使も「そうだ」と続けました。マレーシア大使は、「これを落としたりだめだ。こんな素晴らしいものをどうするつもりなのか」と、もう涙ながらに言うわけです。そしてインド大使が、「聖なる水を崇拝するスピリチュアルな世界こそが大事だ」と言いました。そして、「森里海の水を崇拝する世

界観、それこそわれわれの命だ。これを世界遺産にしなかったら何が世界遺産になるのですか」というぐらいまでの演説をぶったのです。

僕はそのとき感動しましたね。世界の人々がここまで三保松原、森里海の聖なる水、聖なる山を崇拝する気持ちを理解してくれたのかと思ったときには、ちょっと目頭が熱くなりました。それでソクアン副首相が「adapted（世界遺産としてふさわしい）」と言ったときには、みんな立ち上がって万歳をしました。このとき、僕の前に遠山先生が座っておられたのですが、遠山先生は立たれないわけですよ。気持ち悪くなったのかなと思ってチラッと見たら、もう涙をいっぱい流されていたのです。静岡のひとと山梨のひとにとって富士山は本当に誇りなのですね。それが世界遺産になったということで、本当にうれしかったのではないかなと思うのです。県庁のみなさんもみんな泣いたといっています。このようにして、富士山が世界遺産に決まったといういきさつがあります。

縄文時代から続く信仰

ところで、富士山（静岡県）には縄文時代の「大鹿窪」という遺跡があります。富士山がきれいに見える場所です。これは1万3,000年前の遺跡なのですが、この1万3,000年前には、富士山は今に近いような形になっていました。そして、この遺跡を発掘した人に話を聞いて僕は驚きました。この遺跡からは竪穴住居が見つかったのですが、その竪穴住居は広場を囲んで馬蹄形に配列されているのだけれど、富士山が見えるところには1軒も建っていないわけです。すなわち、当時から富士山を仰ぎ見て、そして暮らしていたというわけです。だからわれわれが山を崇拝するという世界観がいかに重要かということが理解できます。

富士山が世界遺産になったということは、東洋の山と水を崇拝する世界観が世界に認められたということです。もしも、三保松原が世界遺産に入らなかったら、「ピルグリムルートから45km離れているからあんなものは世界遺産の対象にならない」という西洋の世界観に屈服した

ことになると思います。しかし、われわれ稲作漁撈型の人間から見たら、この富士山と三保松原は命の水の循環でつながっているわけだから一体なのです。これが今回認められたことで、西洋の価値観に勝ったとまでは言えないけれども、われわれの協力者もたくさんいるということが分かりました。

エリーヌがあこがれた三保松原

ところで、実はフランス人の女性ダンサーでエリーヌという人がいて、彼女は三保松原の天女にあこがれて、フランスで天女の舞いを踊っていたのですが、この人が「三保松原で羽衣の天女の舞いをどうしてもやりたい」と言っていたのです。ところが、残念ながらエリーヌさんは白血病になってしまい、三保松原で踊ることはとうとうできなかったのです。そうしたら、エリーヌさんの遺髪をご主人が持って来られ、フランス大使も一緒に来て、三保松原に塚をつくって埋めたのです。それを聞いた清水市民は感動してそこに記念碑を建てたのです。1952年のことですから敗戦からわずか7年しかたっていない。経済的にも苦しい中で、フランス人の三保松原への思いに感動した清水市民は、寄付を募って記念碑を建てたのです。静岡の人々はみんな謙虚だから、三保松原が世界遺産に登録されてから僕に、「先生、もうひとつエピソードがあります」と言うのです。カンボジアのイコモスの会議で、三保松原を入れるかどうかという会議を行ったときに、ドイツ、メキシコ、マレーシア、インド等の代表は一生懸命に応援してくれたのですが、フランスの代表は、「富士山はすばらしい」と、それだけだったのです。イコモスはフランス語と英語が公用語だから、フランスがOKだったらほぼ大丈夫なのです。ですから、その話をイコモスの査察官にしていたら、フランス代表は三保松原をフランスと日本の友好のシンボルとして、一発でOKしたんだろうと思います。それなのに静岡の人々は奥ゆかしいから、こういういい話を言わないのです。ともかくうまくいったのでよかったのだけれども。これからは、このフランス人のダンサーを顕彰する意味でも、

一生懸命やっていきたいと思います。

山への信仰は水への信仰

ところで、山を崇拝するということはどういうことでしょうか。実は山への信仰とは水への信仰だったのです。富士山と三保松原、駿河湾は、命の水でつながっているということです。だから、水を崇拝するのです。日本人あるいは東アジアの稲作漁撈社会の人々は、山・森・里・海が命の水の循環でつながっている世界に生きているのです。そして、命の水の循環を維持すれば、この美しい大地で千年でも万年でも生き続けることができるのです。だから、聖なる山には森を生やして、そこからこんこんと水があふれてきて、それが水田を潤して、やがて海へ流れて行ってプランクトンを育て、その魚を人間は食べる、というライフスタイルをとったわけです。

これは稲作漁撈社会では当然のことです。自分の田んぼに入ってきた水は、もちろん自分の田んぼでも使いますが、自分の田んぼで使い切ってしまったら次の人が困るでしょう。つまり、水は次の人が使えるようにきれいにして返さなければいけないのです。その次の人も同じです。上流から下流までみんな、命の水で人と人がつながっているのです。こういう社会にわれわれは生きているわけです。

一方、ヨーロッパの人々等、畑作牧畜型の社会の人々、すなわちヒツジやヤギを飼う人は、急傾斜の土地にヒツジやヤギを放牧しますから、瞬く間にはげ山になるわけです。ところが稲作漁撈民は、本来ほっといたら使い物にならないようなこういう土地に自分のエネルギーを投入して、豊かな大地に変えていくわけです。すなわち棚田です。棚田では上から下まで全部の田んぼに水が行き渡るのですよ。これは実はものすごいハイテクです。しかも大地や自然に対する思い入れがなかったら、こんな美しい棚田をつくることはできないわけです。やっと最近、世間でも棚田の価値が分かってきたようで、バリ島では、棚田だけを見に来る観光客がふえてきています。バリのブルガリのホテルでは、1泊6,000ドルもすると

言われて、もうびっくりしました。

ギリシャは森の文明だった

さて、われわれが今まで文明だと思ってあこがれてきたものは、メソポタミアで誕生しますけれども、メソポタミアというのはどんな風景なのでしょうか。実は、現在は木1本も、草1本もない土地です。高校の世界史で「この肥沃な三日月地帯」と勉強したと思いますが、実は「はげ山」なのです。そんな土地には昔から木や森はなかっただろうと思われがちですけど、本当に森があったかどうかということについては、花粉の化石を使って過去の森の状態を復元することができます。これは私の専門分野なのですが。つまり、花粉の化石を見れば過去の森や気候の状態が分かるわけです。

たとえば、シリアのガーバレイというところは、現在は「はげ山」ですが、花粉の分析結果をみると、1万年より前には落葉のナラの深い森があったことが分かります。なんでこんなはげ山になったのかというと、ガーバレイの住民たちがたんぱく質として魚ではなくてヒツジとかヤギの肉を食べ、ミルクを飲み、そしてバターやチーズをつかったからです。これがはげ山をつくった大きな原因なのです。ヤギというのはしゃくりあごで、個体数がふえ過ぎると根こそぎ草を食べますから、地中海沿岸の森がなくなったのは、ヤギが全部食いつづいたわけです。

また、現在のギリシャは、ほとんどが「はげ山」ですよ。僕はこんな土地には森はないのだと思っていました。ところが私たちの花粉分析の結果で、ギリシャ文明は森の文明だったことが分かりました。オリンポスの神々は森の中で饗宴していたわけです。その森がなくなってしまったのです。

僕は地中海文明の研究を長いことしましたが、そもそも僕は若いころにエーゲ海にあこがれてこの地に行ったのですよ。日本の海は緑色をしているでしょう。ところがエーゲ海は青くて、透明度が高いわけです。きれいだけれども、実際に泳いでみたら、海藻ひとつ海岸には落

ちていないし、もちろんクラゲに刺されることもないわけです。みなさんもエーゲ海で泳いでみてください。エーゲ海の生き物は、トドのようにひなたぼっこしているヨーロッパ人だけです。エーゲ海周辺というのは本当に人間しかいない世界なのです。

でも、そんな世界に僕は長いことあこがれてきたわけです。皆さんは違うかもしれないけれども、僕が教育を受けていたころは西洋文明、縦書きで書いたものよりも横書きの英語で書いたものは、とにかく何でもすばらしいと思っておったのです。そのシンボルがギリシャ・ローマ文明だったのです。だから僕は地中海を研究したいと思って行ったのだけれども、実はこの土地は人間が徹底的に自然を破壊したその末路だったわけです。

森を破壊し尽くした世界の国々

地中海文明が崩壊した後、文明の中心地はアルプスより北の土地に移動します。アルプス以北の土地というのは、地中海文明が繁栄したころには、どういう土地だったのでしょうか。ローマの将軍・シーザーはイギリスまで遠征して、「ガリヤ戦記」を書きましたが、その中で彼は「アルプス以北のヨーロッパの大平原には、60日間歩いても森の端に到達できない巨大な森がある」と書いています。ところが12世紀、地中海文明がおかしくなって以降、みんなヒツジとヤギを連れてアルプスの以北に移動し始めるのです。これが大開墾時代です。そうすると瞬く間に森がなくなってって、12世紀から17世紀の間に、イギリスの森が90%、ドイツの森の70%、スイスの森も90%が破壊されたのです。

今ヨーロッパにある森は、18世紀以降に「これではいかん」ということで新たに植林した森なのです。ドイツの「シュバルツバルド」は「黒い森」の意味ですが、黒い森になったのは18世紀以降で、それまでは実は赤い森だったのです。秋になると真っ赤に紅葉するヨーロッパブナやヨーロッパナラの森だったのです。ところがそれが徹底的に破壊されて、「これではいけない」ということでドイツの人々が植林をしたわけです。このときの植林



のやり方が「一斉皆伐造林」という方法なのです。ヨーロッパでは、ブナ林をいっぺん全部破壊した後に、トウヒやモミ等の黒い針葉樹を植えていったわけです。そのときに「一斉皆伐造林」は有効な方法だったわけです。

この「一斉皆伐造林」という方法が林業にとってはすばらしい方法だということで、「ドイツはこんなすばらしいことをやっている」と言って、東大の林学の先生が戦後日本に導入したわけです。日本の林学者たちはドイツのやり方を金科玉条のごとくに日本に導入して、そして日本のブナ林を破壊して、スギをワックと植えていったわけです。東北地方の山林は戦前までは70%がブナの森だったのですが、戦後、ほとんど破壊したのです。それは戦後の日本の林業政策の大きな過ちです。

その過ちはなぜ起こったのかといたら、それは日本人が持ってきた歴史と伝統文化に自信がなくなったからです。これはもう恐ろしいことです。われわれ日本人は、自らが守ってきた価値がいかにすばらしいものか、ということをとに見失うことがあるのです。たとえば、明治維新のときに、多くの浮世絵やすばらしい日本の文化財が海外に流出したでしょう。今だったら、われわれでもすばらしいと分かるけど、当時の明治の人々にとっては、それよりも西洋の鉄砲やすぐれたテクノロジーの方がすばらしいと思い、日本人の持っている伝統的なものはつまらないものだと言って、二束三文で売ってしまったわけです。

同じことが第2次世界大戦後にも起こっているわけで

す。それは日本人が先祖代々守ってきたブナの美しい森を失ったことです。ブナ「櫨」という字は「木偏」に「無」と書くでしょう。ですから、木ではないのですよ。だから「そんなものは切ってしまえ。それよりも金になるスギを植えろ」と言って、ダーッと一斉皆伐造林をしたのです。今ではそれはおかしいと分かるけれども、戦後の当時の人はそれが分からなかったのですね。

これから未来を考えると、そういう過ちにわれわれは今後加担してはいかんということです。林業は、日本の心、日本人の歴史と伝統文化を守るべき原動力であったにもかかわらず、ヨーロッパの市場原理主義に立脚して、金になる木の方がいいということでダーッとやってしまったわけです。そして今、その大きなしっぺ返しが来ているわけです。

先ほどお話しした通り、17世紀の段階でヨーロッパの森が完全になくなりました。そのとき小氷期という気候の悪化が起こるのです。そして多くの人々がアメリカに移住するのです。1620年にメーフラワー号に乗ってアングロサクソンが初めてアメリカ大陸に渡りました。それまではアメリカは森の国だったのです。ところが、アングロサクソンがヒツジとヤギを連れてアメリカに渡ると、たった300年間でアメリカの森は80%も破壊されたのですよ。そして、森が破壊されるということはどういうことかということ、森の中の生きとし生けるもの、何億何兆という数の命あるものが全部殺されていったということを意味しています。それと同時に森里海の水の循環系がアメリカの大地から消えたということです。

樹齢3000年ぐらいの大きいセコイアの根元に穴を掘って自動車を通して、という有名なアメリカの写真があります。僕は小学校の頃にその写真を見て、「何とアメリカはすごいんだ。こんな大きな大木にトンネル掘って車を通して、さすがアメリカだ。日本人だったら、こんな巨木を見たら、しめ縄巻いてお祈りしているのがいいところだ。それに比べたらアメリカはすごいな」とあこがれましたよ。でも、今は誰もこんなことを素晴らしいとは思わないですね。木の隣に道路を通したらいい

いわけでしょう。何でこんな穴をあけなければいけないのだと思うでしょう。アメリカ文化の原点はこんなところにあるということです。

中国も同様です。たとえば、黄土平原には森なんかないと僕は思っていました。ところが私たちが花粉分析をやったら、4,000年前までは深い森があったことが分かりました。今のように森がなくなったのは清代のことです。清代になって完全に森がなくなったのです。

もっと恐ろしいのは四川省のチベット高原で、ここへ僕は調査によく行きました。海拔3,800mのところで、こんなところにはさすが森はないだろうと思っていました。ところが花粉を分析したら、トウヒ、モミ、カバノキ、ヤナギの森が1,500年ぐらいまではあったのですよ。それを全部あんなふうに破壊してしまったのです。

一方、日本の国土は70%も森で覆われているでしょう。こうした事例に比べると、それがいかにすばらしいことが理解できると思います。人はせいぜい生きても100年しか生きられないわけですが、森の巨木はその何倍も生きているわけです。だから日本人はその命の重みに感動して、しめ縄を巻いてお祈りしているわけです。

森の防潮堤

2つ目は、東日本大震災後の防潮堤についての話です。

仙台空港の南の地区では、家も全部なくなってしまいましたが、わずか1.5mの丘の上にある神社の小さな社だけがまったく無傷で残っているのです。だから、「これは神の力だ」とか言って、みんなワーワーと言っていました。実は、古い神社があるところは、ほかでも社が残っているのです。あんな巨大な津波が来て、車まで飛ばされたのだから、小さな社なんてひとたまりもないと思うでしょうが、まったく無傷で残っているのです。

仙台市荒浜に「狐塚」という社があるのですが、これはちょっといわれがあって、「この場所は絶対動かしはイケない」という昔からの言い伝えがあったのです。かつて道路を整備する際に、この社をどけようと思ったらしいのですが、そういう言い伝えがあって地元の人が

絶対動かしてはいけないというので、この塚で道路が左に曲がっているのです。そして、この社もまったく無傷なわけです。それはなぜかといったら、1.5mの高さがあって、鎮守の森に囲まれていれば、津波対策は実は十分だということです。

それなのに、仙台平野で今、何が行われているかというと、高いコンクリートの防潮堤をつくろうとしているわけです。

宮城県知事は復興を推進している知事として有名な方です。彼はなかなか頑張っています。3.11の津波が起こった直後の2011年6月に、当時民主党政権でしたので、民主党本部にやってきて、「防潮堤をつくってくれ」と言ったわけです。その背景には、復興予算を取りたいという希望もあったのでしょう。また、みんなまだ津波が怖いときですから、復興で防潮堤ができるのはいいわ、ということで、その予算を政府もつけたわけです。

しかし、まずここに大きなボタンの掛け違いがあったわけです。復興するときには、まず住民の生活をどう立て直すかを考えなければいけないのです。ところが50年後に来るか来ないかわからないような津波対策の堤防費用を取ってきたわけです。それはものすごく大きな間違いであり、本末転倒だと僕は思うのです。まず知事としてやるべきは、住民の命を守ることはもちろん大事なことです。でも、命を守るということはどういうことでしょうか。それは、あしたからの暮らしが立ち行くようにするということです。50年後に来る津波に備えるためには、まず明日にでもやるべきことは、みんなの生活を立ち直らせることです。それなのに知事は何をしたのかと言うと、復興予算を取ってきて、堤防をつくるということをやったわけです。

しかも、過去、いろいろな津波はありましたけれども、50年よりも短いスパンで来た津波はほとんどないのです。それよりも大事なことは、あしたの暮らしをなんとかしなければいけないということでしょう。

ところが、知事は堤防をつくるための予算を取ってきたわけです。そして、県議会で、これから堤防をつくる

と言ったら、59名の県会議員が全員反対したのですよ。全員が反対したのだったら、そんな議案は県議会を通らないと普通は常識で思うでしょうが、なぜか通ってしまい、今は工事に着工しているわけです。

県会議員が全員反対しているのに、何でそんな議案が通ってしまうのでしょうか。それはどうしてか、と僕も不思議に思いました。今の知事は堤防以外の復興はよくやっておられる、だから堤防の件は二の次の話だから、まず経済復興を優先する知事に真っ向から反対できないと県会議員を代表される相沢議員は言うのです。しかし、私から見るとそれも本末転倒の話に見える。宮城の人々にとってまず重要なことは、人の命を支える自然、なかでも命の水の循環を守ることこそ第1義的に考えられなければならないはずです。ところが、は森の防潮堤の建設は第2義的問題だから優先度が低いと考えて、経済復興でよくがんばっているから知事の言うことを聞きましよう、知事の独断でコンクリートの巨大防潮堤がつけられているのです。県会議員の先生がたも地元の経済、特に建設会社が絡んでいるから、表向きは「森の防潮堤」に賛成し、コンクリートでつくるのはよろしくないと言っているのですが、防潮堤の議案は実際には通しているわけです。

結局、宮城県では総延長160kmの全部の海岸にわたって防潮堤をつくるという計画となっています。この防潮堤は高いところでは高さ15mもあります。高さ15mというのはどういうことを意味するかというと、堤防というものは力学的高さ1に対して幅は5、すなわち1対5の関係なのです。ですから、高さが15mあるということは、その5倍の75mの横幅があるということになります。そんな巨大なものを宮城県の海岸全体につくるという計画になってしまったわけです。

未来を見通す目がリーダーには必要

国政も地方政治も、みんな一生懸命だったかもしれないけど、未来を見通す目がないと思います。なぜ、見通す目がないかというと、宮城県ではもうひとつ、大きな

間違いをやっているのです。それは漁業協同組合を県で一括して、そこに企業が参入するようにしているのです。たとえば、小さなポンポン船に乗って毎日海に出かけて行って、必要な分だけ海の資源をとってきて売る、という経済的には非効率的ですが、自然の資源と循環系とを守りながら漁村で生き続けるということの価値が分からないのでしょうか。それで、「何でこんな非効率的なことをやっているんだ、もっと企業をどんどん導入して効率的なことをやった方がいいじゃないか」ということで、宮城県の漁業協同組合を一括して、県でひとつの単位になったのです。そしてそこを特区にして外資もは入れるようにした。お金に物を言わせる中国資本が日本の漁業に参入するのは時間の問題でしょう。

僕はこの話を聞いて、もう頭にきて、菅官房長官のところへ直訴しに行ったのです。ちょうどそのときアルジェリアで日本人が殺されるという大きな事件が起こりました。だから官房長官としては忙しいはずなのですが、僕が「30分ください」と言ったら、30分ちゃんと話をきいてくれました。それで、「県会議員59名全員が反対しているのだけど、巨大な堤防ができてしまいます」という話をしたら、「いや、それはにわかに信じがたい話だなあ」とおっしゃって、自分の子飼いの県会議員にすぐ電話されたのです。そうしたら、県会議員の方が、「その人が言っていることは本当です。実際われわれ59名は反対声明出したのですが、知事の独断で決まっています」ということを言ったのです。それで菅官房長官は初めて僕を信用してくれて、それからいろいろと支援してくださるようになったのです。

その後、僕は厚かましいから太田国交大臣にも会いに行ったのです。太田大臣と会って「太田先生は公明党だから、毎朝、南無妙法蓮華經を唱えられているでしょう」と聞くと、「はい、唱えています」と言われるので、「南無妙法蓮華經を日蓮大聖人が一番最初に発想した場所はどこかで存じですよ。コンクリートのこんな部屋の中でやったわけではない。朝日が昇るその朝日を見ながら太平洋の海に向かって、初めて南無妙法蓮華經を唱えら

れたのです。その南無妙法蓮華經を唱えておられる大臣自らが、巨大なコンクリートの壁をつくって海と人間を遮断するということは、日蓮大聖人の教えに反するのではありませんか」と僕は失礼を顧みず申し上げました。大田大臣は、苦笑して、黙っておられましたけれども、「関東大震災のときに火事から守られたのは鎮守の森があったからです。鎮守の森の中に逃げた人はみんな助かっているわけです。火からも水からも守る力があるから、安田さんがおっしゃるように、森は大事ですね」とおっしゃったのです。

堤防で埋まってしまう砂浜

仙台平野は広いから、防潮堤の高さは7.2mになるのですが、そんなに高いと思わない。海岸部の方はコンクリートに穴があいていて、空気を抜いているのです。津波が来たときに、空気が防潮堤から出るときに堤防が壊れるらしいので、あらかじめ空気抜き穴をあけているわけです。

一方、内陸側はベターッとコンクリートを張っている状態です。どうしてコンクリートを張っているのかというと、今回の津波のときに陸側は引き波によって破壊されているわけです。波が引くときにやられているから、陸側の方をより頑丈にしているわけです。そして、あまり「森が大事だ」というものだから、国土交通省は防潮堤に盛り土をして、そこに植林しようという案を出してきたわけです。まあそれについては、彼ら担当者としても必死で頑張っているわけだから、僕も「ノー」とは言えないわけです。

僕らの理想は、防潮堤の上に盛り土をして、ポット苗でマツとか照葉樹を植林するというものです。マツとか照葉樹の根っこが浸透して行って、堤防を強固にするわけです。ところが、実際にはコンクリートがベターッと一面に張られているから、根っこが入れないのです。海側に空気抜き穴をあけているのだから、陸側にも根が入れる穴をあけたらいいわけです。ところが今まではそういう発想がなかったものだから、内陸側はベターッと

したコンクリートを張っているのです。われわれが心配なのは、ここが地すべり状態になって、ガサッと崩れてしまう可能性だってあるという点です。

たとえば、大槌町では、もともとの防潮堤は5mぐらいの高さだったのです。それが、東日本大震災後は、津波の恐怖があるものだから、「こんなじゃとても津波に耐えられない」と言って、「防潮堤の高さを上げてくれ。14mから15m近くまで上げないととてもだめだ」とみんな言っていたわけですから。大震災直後はそういう状況だったのです。

確かに大震災直後のころは、みんな津波が怖かったから、「防潮堤の高さを上げろ、上げろ」と言っていたのですが、大震災からもう2年たったでしょう。今まで海岸部で暮らしてきた人は、海とともに生きてきた人です。さすがに、こんな大きな堤防で海と遮断されて潮騒の音が聞こえない、海のにおいをかげない、美しい海が見えないところでは、暮らせないとはい始めた。

岩手県の知事はそうなるまで待っていた。岩手県の知事は多分こうなることが分かっておられた。岩手県の基本は、「未来のために海の資源を守ることだ」ということで、それを打ち出したのです。一方で、たとえば田野畑海岸等、もともと高い堤防があったので、「どうしても高い堤防をつくってくれ」というところは仕方なくつくると判断をしました。

ところが、宮城県知事は「津波が怖い！」と人々が叫ぶ震災直後の判断で堤防をつくることを決定をしてしまった。そのためのお金をもらってきた。だから、その予算を限られた期限内に消化しなければならない。だから宮城県においては、気仙沼のリアス式海岸においてさえ、コンクリート防潮堤がダーッとできて、海と遮断されてしまうのです。

さらに気仙沼では川沿いに津波が遡上しましたから、直径300mしかない沖積平野を流れる川幅10mの川の兩岸に、高さ11.3m、そして片方の幅45m、片方の幅45m、合計して90mの堤防をつくる。つまり、この沖積平野の半分をコンクリートの堤防で占めることになり

ます。そんな計画を宮城県はしているのです。

高さ11.3mの堤防が気仙沼の川沿いにできたとして。目の前に高さ11.3mのコンクリートの堤防がある。そして、後ろを見たら山でしょう。山と堤防の窪地に人間は住むことになるのです。そんなことでは、人間の命が輝くわけがない。そんなところには住めない。そして、もしも次に津波が来たら、その窪地に水がたまりまうから、なかなか水は引かないでしょう。

宮城県の大谷海岸は、美しい砂浜で僕はよく海水浴に行きました。ところが、この大谷海岸に高さ11.8mの堤防をつくるというのです。この堤防の底辺の幅は50mもあります。ただし、大谷海岸の砂浜は50mしかないのです。つまりどういうことかということ、砂浜全部を堤防で埋めることになるのです。そんなことを今やろうとしているわけです。

奥尻島の二の舞になってはいけない

北海道の奥尻島という島がありますね。ここは1993年に津波の被害を受けました。そこで、高さ11mの堤防で島を囲ったのです。しかし、11mの高さの堤防で囲って海と隔離してしまったから、もはや観光に行く人なんかいなくなった。しかも11mの防潮堤を建設してから20年が経って、奥尻島の海に白化現象が起こってきた。磯焼けです。それは防潮堤の建設で地下水が海へ流入することを遮断してしまったため、森の栄養分が海へ流れ出ず、海が死んでしまったのです。若者はみんな仕事がないから東京へ出て来て、今いるのは老人だけです。島は完全に寂れてしまいました。これと同じことが宮城県でもあと20年後に起こります。

一方で、環境省は宮城県の海岸沿いを三陸復興国立公園に指定したのです。気仙沼の一帯が全部、国立公園になりました。それなのに、ここに高さ11mとか15mの堤防を今つくろうとしているわけです。それで、僕らはあまりにひどいから反対運動を始めたのです。

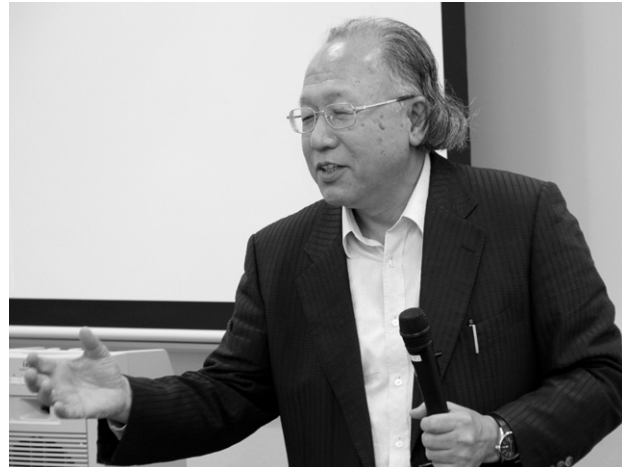
リーダー論は植林から始まる

ところで、生態学者で、公益財団法人地球環境戦略研究機関国際生態学センター長の宮脇昭先生が、被災地の海岸に「瓦礫の堤防をつくろう」とおっしゃったのです。その意をくんで、この間、宮城県岩沼市で、「千年の森の植樹祭」が行われましたが、定員3,000人のところを4,500人ももの来場者がありました。2回目の植樹祭の時は、太田国交大臣も来られて、「今回のこの植樹祭を緑の減災計画の第一歩にしたい」という挨拶をされました。そのときに、苗木を用意して盛り土した堤防の上に植樹したわけです。

そこで、僕が植樹をしていた時に、隣で植樹しておられたのが宮城県の副知事さんでした。周りのみんなは、いつどつき合いが始まるのではないかと思って見ていたらしいです。僕も最初はものすごく緊急しました。2人が並んで15～16本植えていったんです。それで、植え終わって2人がパッと顔を見合わせたら、意外に穏やかな雰囲気か2人の間に漂っていたわけです。これは不思議ですけど、木を植えるということは、気持ちを穏やかにするということなのです。皆さんも会社の中で自分の担当している部がおかしいと思ったら、みんなで植林に行ったらいいですよ。帰るころにはみんな和気あいあいと気持ちが穏やかになりますから。何もノウハウなんか要らない簡単なことです。リーダーシップなんて関係なく、みんなで木を植えればいいのです。

僕は今、長野県の本島平村に、小学校を改築して「農村文明塾」というのをつくったのです。そこへ企業の人たちを連れて行って、みんなに一日、木を植えてもらったり農作業をしてもらったりしています。こうして大地や自然と触れ合う中で、人間の心は開放されていくのです。机上の難しいリーダー論なんて関係ないのです。実際に植林をするとか、田植えをするとか、自然と触れ合う中で、人の心は穏やかになっていき、ほんとうに人と人が分かり合うことができるようになるのです。

人間がほんとに元気で力強く生きようと思ったら、人



間以外の命あるものととともにどう生きるかということを考える必要があります。そうしたら、おのずからその力が自分を生かしてくれると思うのです。生きとし生けるものが一生懸命応援してくれるわけです。だから、こんな堤防をつくったらあかんわけです。

巨大堤防が宮城の海を殺す

もっとも恐ろしいことがあります。それは海岸部の巨大防潮堤は軟弱地盤の上につくられるということです。巨大なコンクリートの堤防は重いから、支持杭を打たなくてははいけない。支持杭というものは普通、土木では矢板なのです。矢板を打つということはどういうことかというと、地下水の循環を遮断することなのです。これが生態系には決定的な影響を与えるのです。森里海の水の循環系が矢板で全部遮断されてしまい、宮城の海は死ぬわけです。

これに関して、僕はものすごく苦い経験があります。福井県の若狭町に三方五湖という美しい湖があって、その前に高速道路ができたのです。この高速道路は軟弱地盤の上に土盛りしたわけですが、軟弱地盤の上だから矢板を打つでしょう。そうしたら突然、水の循環が変わってしまったのです。それまでは湖には夏になったらアオコが発生していたのです。しかし、今は夏になると湖面一面にヒシがダーッと発生して、水面が見えなくなってしまうのです。地元の人「何ででしょうね？」と言うわけですが、その理由は決まっているじゃないですか。

道路ができて地下水の循環を変えたので、湖に流れて行く水の性質が変わったわけです。日本列島においては、森の栄養分を含んだ水が海に流れて行って、その海底から噴出する栄養分を含んだ地下水が魚を育てているのです。このことはほぼ常識になってきました。ですから、森里海の水の循環を守り続けることがわれわれにとってとても大事なことなのです。

未来の子供たちに何を残す

僕がイギリスにはじめて行った時、カルチャーショックだったことがあります。ケンブリッジから湖水地方と呼ばれる田舎の方に行ったのですが、高い山に登ったらこんこんと清水がわいているわけです。それで、のどが渴いたから飲もうかと思ったら、イギリス人が、飲んではいけないと言うわけですね。どうしてかと言ったら、その水はヒツジやヤギの糞で汚染されている、というわけです。

ところが日本は、その辺の山へ行って清水がわいていたらすぐ飲めるでしょう。世界第3位となったとはいえ、世界の経済大国になった国であるにもかかわらず、日本は、国土の70%が森で覆われていて、美しい自然と美しい水があるわけです。いかに日本が素晴らしい国が分かるでしょう。だから僕は、三保松原を世界遺産にするために、世界と戦ったわけです。こういう森里海の水の循環

系をきちんと守ることが、われわれの子どもたち、子孫に対する責務であるわけです。

僕が東北大で授業しているときに、「きみたち、巨大なコンクリートの堤防を欲しいか」と若者たちに聞いてみました。そうしたら、100人のうち99人は要らんとするのです。豊かな自然の方がいいと言うわけですよ。1人だけ堤防をつくれという学生がいて、それは中国からの留学生でした。だけどわれわれ日本人は、そんなものは要らんわけです。津波が来たら高台に逃げればいいわけです。高台に家をつくって、低地は生産の場とか観光の場にすればいいのです。

今われわれが考えているのは、こんな堤防です。すなわち、コンクリートではなくて、石垣の堤防をつくります。石垣は空間があいているでしょう。そこはいろいろな生き物がすめる場所になります。そして、堤防は後ろに広い空間を設けて、そこに植林して森の堤防をつくります。コンクリートの堤防で周りを全部固めてしまうのはいけない。山の斜面にコンクリートで四角形をつくり、その真ん中が土になっているところがあるでしょう。ああいうものをやれないかと僕は提案しているのですが、なかなか国交省はうんと言わないのですが。

未来の子供たちに残すべきは森の防潮堤であって、コンクリートの防潮堤ではない。こういう夢のある未来を考えていかないといけないと思います。

Part2：質疑応答

【太下】 安田先生、どうもありがとうございました。とてもパワフルなご講義をいただきました。これからディスカッションを進めていきたいのですが、巖流塾の塾生も事前に勉強していますので、このディスカッション部分の進行を塾生の宮本君にお願いしたいと思います。では、よろしくお願いします。

【宮本】 宮本でございます。よろしくお願いいたします。

では、今からディスカッションの時間にさせていただきます。

先生のお話を伺って、山から里に水が行って海に行ってそれが循環するという環境の話もあり、あと序盤にお話しされてカットされたその2のところも含めてなんですけど、農村稲作の文明と、どちらかというそうではないヒツジとかヤギというところの文明の対立。そういう価値観が根本にある中での文化、思想の違いとか、いろいろお話を伺ったところでございます。まずは塾生問わず皆様に、このようなお話を伺ったうえで何かここについて突っ込んで聞いてみたいとか、御意見ある方はいらっしゃいますでしょうか。

では、こんな問いかけて何なんですけれども、われわれはこれについて事前にディスカッション等をしてきましたので、まずは塾生の者たちから質問させていただきます。

【小松】 小松と申します。奈良から来ておりまして田舎には住んでいるのですが、きょう森里海の循環というお話がございましたが、そのあたりのことは塾でも今までも勉強してきておりまして、先生がおっしゃられているお話に関してまったく違和感がなくて、おっしゃる通りなのかなと思っております。

ただ、私はふだんの仕事はコンサルタントですので、先生が別の本で書かれていらっしゃる通り、市場原理主義や金融資本主義の思想も非常に理解している中で、先生がおっしゃっているような自然を大切に、ア



太下義之氏

ニミズムの考えは素晴らしいと思うんですけれども、浸透させていくためには、より市場原理主義や金融資本主義より魅力的だなと世の中の人に理解してもらう必要があると思っています。

たとえば新興国も結局、多分先生が真ん中のお話で飛ばされたわれわれと価値観を同じくする国ということで、東アジアの国や東南アジアの国々を想定されていると思うんですけれども、そういう国々も実際今どっちを向いているかという、おそらく市場原理主義や金融資本主義のところで勝っていくという方向に動いているように私は見えるんです。それらの国々を日本人の古来の考え方、価値観に共鳴してもらって、どう取り込んでいくのかというのは現実的には非常に難しい。どういうふうにその魅力を訴えていけばいいのかなというのが悩ましいと思うんですけれども、そのあたりは先生のお考えはいかがでしょうか。

【安田先生】 たとえば市場原理主義を徹底してやったことによって人は幸せになったかどうかということですよ。その点についてはどう思いますか。

【小松】 私はなっていないと思います。私自身も別にそこを追求したいとは思いませんが。

【安田先生】 一方で、市場原理の社会にいる以上は、お金持ちになりたいということもみんなの欲望ですね。ただ1980年代後半の頃までは、GDPが上がれば国民の幸福度指数もどんどん上がっていったけれども、

90年代になったら、幸福度は下がっていくという有名な調査結果があるじゃないですか。

ところで、京セラという会社は派遣社員が1人もいないのです。全員を正社員にしているのです。そして、リーマン・ショックの後は、みんなで草取りをしていたわけですよ。さらに、京セラは、実は会社のお墓もあるのですよ。知らないでしょう。僕はの間行ってきましたけれども、円福寺という京セラのためのお寺とお墓があるのです。社員は、もちろん自分の家にもお墓はあるのですけれども、「死んだら自分もそこへ埋葬してくれ」とか「分骨してくれ」という社員がたくさんいるそうです。

つまり、日本の企業というものは、いったん就職したら死ぬまで保障するのが一般的ですが、京セラでは死んでからも保障するということですね。こうしたことに対して、市場原理主義者は「非効率的だ」とか「そんなことやっていたら、国際競争に負けてしまう」ということを言うわけですが、人間が本当に心を落ち着いて幸せを感じることができるのはどちらかなと思いますね。

市場原理主義は、お金もうけだけ、利潤を上げるということだけで突っ走っているわけで、そして、非正規雇用の人と正規雇用の人が同じ仕事をやっても給料が違うということが当たり前になっているのですけれども、そんなことは長続きしないと思いますよ。人間として本当に何が幸せかということを追求する、そういう企業が生き残るんじゃないかなと思います。

【小松】 アニミズムなりの考え方に立てば、山や岩、ほかの生き物でさえ同じ生きとし生けるものとして尊重するということであれば、当然同じ企業で働く人間だから、人としてちゃんと扱うのが当たり前でしょうという話が導かれるわけですね。

【安田先生】 人として見る、そんなことは当たり前じゃないですか。

【小松】 それはそうですけど、派遣社員と正社員とある



小松創一郎氏

ということであれば、それはある意味同じ「人」として扱っているかどうかというところは、ちょっと違いがあるんじゃないかなという気はしますけど。

【安田先生】 もしも違いがあるのだとすると、そういう市場原理主義の考え方自体に大きな問題があるということです。市場原理主義がいつ誕生したかといったら、先ほど申し上げた17世紀にヨーロッパの森が90%もなくなった時です。マルサスの人口論が市場原理主義の原点でしょう。その市場原理主義というものは何かというと、自然を徹底的に破壊したその時に、人間が考えたことなのです。そうした考え方に立脚して現在の経済が繁栄しているわけだから、いずれ僕はこの考え方は行き詰ると思うのですよ。自然と人間を分断した考え方が永遠に続くことはあり得ないと思いますね。

たとえば京セラでも、四半期ごとの業績評価をやっているのですが、子会社を集めて、社長にひとりずつ発表させて、会議をやるわけですよ。ところが、おもしろいことがよく分かりました。つまり、稲盛フィロソフィーを徹底してやっている子会社は、みんな業績がいいわけですよ。やっていないところは業績が悪い。

では、「稲盛フィロソフィー」とは何かというと、それは何も難しいことを言っていないのです。うそをついてはいけな、一生懸命頑張らましよう、といった普通の人として生きるべきことしか言っていないのです。

よ。難しいことは何も言っていないのです。でも、それを徹底してやっているところは業績が上がっているわけです。そして、徹底不十分なところは業績が悪いのです。

【小松】 分かりました。ありがとうございます。

【宮本】 それに絡めて何かご意見ある人はいますか。

いなければ私からそれに絡んでの質問なんですが、先ほどの稲盛フィロソフィーを守っているところは、基本的におっしゃる通りだなと思うんですが、私もコンサルタントでたとえば企業に説明するときに、必ず聞かれるナンセンスな質問がありまして、じゃあそれってどうやって収益に結びつくか立証できるの、科学的に話してよとかこういう話をされた瞬間に、たとえば稲盛フィロソフィーも、聞けばそうだと、もうおっしゃる通りで人間らしい、企業も法人としてつまり人格者として社会に人間らしく生きて、社会に貢献して、そして私利私欲というより利他のために生きるというようなことをすれば、おのずと自分に返ってくる、情けは人のためならずというところを話したら、うん、この話は分かるよと言われるんです。

次に、マーケットメカニズムというより、目に見えたものが分かりやすいというところを信じている人は、じゃあそれがどう利益につながるのかと聞かれるんですけども、そういうときの人の説得方法というのは、



宮本祐輔氏

どういうのがあるのかで教示いただきたいと思います。

【安田先生】 難しい質問ですし、人の考え方次第だと思うのですが、つまりあなたは何のために生きているのですか、ということですよ。たとえば、利益を上げるために生きているわけですか。

【宮本】 あえて逆の立場に立って反論させていただくと、利益のためとかそういうところは置いておきながらも、そういう人たちがよく言うのは、とはいえ資本主義社会というのは利潤を生み出して、それをさらなる成長につなげるというのが定義だと思いますと、大体こういう答えが返ってきて、個人として生きるためには、やはり成長とか利益というところは必要になるので、そのための手段として利益というのは欠かせないと思います、と大体こういうことですね。

【安田先生】 たとえば、原爆をつくった科学者がいるわけでしょう。原爆をつくるのが悪であるということは分かっているけど、自分は興味があるからつくってしまうわけです。それと同じじゃないかな。利益のためだったら何でもやる、たとえば人を殺してでも利益を上げるのか、ということです。

人が生きるということは、人の幸せのためであり、人が幸せになれば自分が幸せになる、それは間違いなことですよ。世の中というものは、自分ひとりで生きているわけではなく、人と人の中で生きているわけだから、いくら自分だけが幸せであっても、人が不幸せだったら自分は幸せではないのですよ。自分が幸せであるということは、みんなが幸せであってこそ初めて幸せなのだから。それなのに、利潤を上げるためにだけ生きているという人が、世の中にいるのでしょうか。

【宮本】 純粹にそれだけの人というのは少ないと思うんですけど、程度問題で、その程度が強い人というのはそれ相応にいるんじゃないかと考えます。

【安田先生】 それは程度問題じゃないでしょうか。日本の企業は100年とか長寿企業が多いでしょう。なぜ日本の企業は100年間もずっと生き続けるのか、という

ことは、逆に言えば、日本の企業は単発で金もうけをするのではなく、100年間生き続けることに最高の価値を置いているわけです。短期と長期と、どちらに軸足を置くかによって自分の生き方も違って来るのです。確かに短期的に見ると、今金もうけすることの方が大きな力を持っているわけですが、もう少し長い目で見たら、100年生きる企業の方が大事ではないでしょうか。そういう価値観をみんなが持ちだすと世の中は多少変わらなうと思うのですけれどね。

【宮本】 それはおっしゃる通りだと思います。

【安田先生】 そうは思うけど、なかなか実行は難しいですね。

【宮本】 そこで話したいところなんですけど、ほかの皆様これにかぶせて何かありますか。大島さん、よろしくをお願いします。

【大島】 海外アドバイザリー事業部の部長をやっております大島でございます。

今の小松さん、宮本さんの話にかぶせる部分もあるんですが、私は海外部門のアドバイスをやっていて、今まで海外でアメリカとインドネシアで6年ずつぐらい仕事をしてきました。現地のお客様でローカルの経営者でも、日本の企業、たとえば稲盛さんの書かれた「パッション」なんて本を結構読んでいらっしゃる。あと多いのが松下幸之助さんの本が結構アジアでは読ま

れているなという感じを持っています。

経営者としてはやはり華人の方が多いんですけど、彼ら自身もファミリーで維持していくためには、きっちと人を育てないとだめだねという強い認識がある。ですから、すごく勉強されていて、やはり日本と同じような質問が出るんです。資本主義的に言えばもっと儲けた方がいいと思うんだけど、有能な人がいないので、加速して儲けようとするとうんしそうで怖いと。われわれの方から申し上げたのは、「いやその通りです。それは無理しない方がいいですよ」ということでした。それが実は回答だったんです。結局、人中心で考えると、スピードというのはおのずと限界があるというのがひとつ目の答えだったんです。

2つ目の答えとしては、京セラの場合、アメーバ経営という一人ひとりがどれだけチーム単位として役に立っているのかというものすごく細かい緻密な積み上げが一方である。あれが実は利潤のネタになっていると私は思っています。それを動かす秘密が、まさにフィロソフィーで、京セラフィロソフィーのすごいところは、表裏を出さなくて済む。全部本音でやっていいというのは、実は最も効率的な生き方なのかもしれないと考えています。

【安田先生】 それは普通の生き方です。

【大島】 ありがとうございます。そういう意味では日本の組織というのは、もともとは村社会が原型で皆がお互いをよく知っている、表裏ない方が住みやすくなっていた。それを企業版でやってみたときに、京セラさんのようになりましたという事実がある。そう認識すると、先生がおっしゃろうとした2つ目のポイント、日本はこれからどこと一緒にやっていくんだという話につながらなうんです。その辺の話を一番聞きたかったもので、そういう話の引っ張り方をさせていただくんですが、アジアの多くは稲作文明で、そういう村単位で組織をつくってきた人のDNAの中には、日本人と同様、周囲にいる人をよく知って活かすことが大切という目線がある。社会や組織に期待することの近さ



大島誠氏

ですね。そういうところは一緒に暮らしていけるし、理解し合っていけるのではないかと考えているんですが、いかがでしょうか。

【安田先生】 なかなかいい質問ですね。おっしゃる通りだと思いますよ。日本がどこの国・民族と一緒にやっていくことができるのかということは、一番最初の小松さんの質問にも関係しますね。

文明の原理というものがありますが、文明には男性原理と女性原理があるわけですよ。たとえば、漢民族では家庭で一番偉いのはお父さんなのですが、これは父性原理なのです。ところが、われわれのような稲作漁撈社会では、一番威張っているのは女性であり、これは女性原理の文明なのです。

たとえば、魏志倭人伝に、対馬の大官と副官が出てきます。副官は卑奴母離、大官は卑狗と言います。卑しい^{しぬ}狗と書いて「卑狗」と言うのです。狗よりも卑しいという名前が一番偉い大官であって、そして副官は卑奴母離、狗よりも卑しい母だというわけです。ここに「母」という字を書いているわけです。この魏志倭人伝は漢民族がつくったわけですから、男社会から見た記録ということです。対馬では、入れ墨して海にもぐって魚とったり、女性中心の社会であったり、ということが漢民族にとって異常な社会に見えたわけですね。

みなさんも漢民族の人に「家の中で一番偉いのは誰ですか」と一度聞いてみてください。答えはみんな「お父さん」と言うに決まっていますよ。われわれは逆に「お母さんが偉い」と答えるわけです。一神教の欧米では、レディーファーストとか言っていますが、キリストは男性でしょう。ギリシャのゼウスだって男性でしょう。ところが日本は、最高神の天照は女性じゃないですか。

つまり、われわれの文明には女性を中心とした原理があって、その文明原理はどこから来ているかということ、縄文時代からずっと続いているわけです。縄文時代の土偶は99%と言っていいぐらい妊婦なのです。つ



まり、縄文時代というのは女性中心の社会だったということです。その女性中心の社会の原点になるのは何かといたら、それは「命」です。命が生まれて、成長して、そして死ぬ。これが一番世の中で重要なことなのです。

今は金融至上主義で、お金のためには子どもを殺したり、離婚する人だってたくさんいるわけですがそれでも、そうではなくて、当時の縄文時代にとって一番大事なことは、子どもが誕生し、成長し、そして死んでいくという、命の循環が最も大事なことであったのです。そして、縄文時代の社会のリーダーは誰かと言ったら女性なのです。このように、縄文時代は女性中心の社会であり、その原理が今日までずっと残っているわけです。

お米をつくるということは女性でもできるわけです。ところが、畑作牧畜型の社会では、ヒツジやヤギを飼うので力が要ります。これらの仕事は男じゃないとできないので、どうしても男性中心の社会になっていくのです。そして、闘争的で相手をやっつける社会になっていくのです。

けれども、稲作漁撈社会では、お米をつくるということは女性でもできますから、「初穂の儀礼」では、おばあさんが一番最初に初穂を取り入れるわけです。中国の少数民族の瑶族^{ようぞく}の家には、大黒柱に取り入れた初穂を飾るのですが、稲穂のベッドとおばあさんのベッドがあるのです。しかし、おじいさんのベッド

はないのです。だから、おじいさんは囲炉裏の隅の方にちょこんと座っていますよ。

われわれは明治以降、ヨーロッパの軍隊方式を取り入れて、その教育を受けてきましたから男中心の社会になってしまいました。でも本当は、日本の社会は女性原理なのです。実際、ご家庭で財布のひもを握っているのはだいたい奥さんじゃありませんか。僕の家庭もそうですけれどね。

ヨーロッパを女性が旅行すると、男性がタクシーのドアをパッとあけてくれます。これを「レディーファースト」と言うでしょう。うちの家内も、「さすがヨーロッパね、すばらしいわ」と言うのだけれど、本当だったらドア蹴破って入っていくくらいに、日本の女性は強いのですよ。だから、日本の企業は、もうちょっと女性原理を企業の中に取り入れていくといい点が出てくるかもしれないですね。

イギリスの写真家ポンティングが『この世の楽園 日本』In Lotus-land Japanと題する写真集を1910年に刊行しているのです。ここでポンティングは、第1次世界大戦よりも前の時代の日本を撮っているのですけれど、働いている女性にフォーカスがいつているわけです。たとえば、女性が田植えで重いものを担いでいたり、労働している女性の存在は、ポンティングにとってはものすごく珍しかったわけです。このように、日本の稲作漁撈社会とは、女性が頑張っている社会なのです。そして、女性の頑張っている社会が日本の他にどこにあるのかというと、東南アジア等にあるわけです。

世界の中で環太平洋地域とアフリカの一部は女性原理の社会で、命を大事にする文明があるのです。この話を中谷巖先生が主催されている「不識塾」で僕が申し上げたら、塾生のひとりが、「その地域は、味の素が売れているところと同じです」と言ったことは面白かったですね。

ある時、僕がエジプトから帰る飛行機で、隣に座った人と食事の時に話をしたら、その人は味の素の副社

長だったのです。それで、僕が「どこへ行っていたのですか」と聞いたら、「アフリカへ行っていた」ということでした。アフリカでは今、味の素が売れて売れて困っているそうなのです。アフリカでは、味の素の1パックがお金のかわりにもなっているそうですよ。味の素というのは要するに“うまみ”でしょう。うまみの元は魚介類ですよ。だから、味の素が売れている地域は、魚や貝を食べることのうまさを知っているわけです。

また、僕はカンボジアに若い学生をよく連れて行くのです。そうしたら若い学生が、「先生、ここは食事おいしいです」と言って、丼飯を2杯ぐらい食べるわけですよ。「お前、なんでそんなに食うのだ」と聞くと、「ここのお米は農薬に汚染されていないから、おいしいです」と言って食べているわけです。実は、カンボジアの農産物はものすごく農薬に汚染されているのですが、なのに何でおいしいと言うのかということ、これは味の素の味なのです。世界の人々は、味の素のうまみというのを分かり始めたということです。

この環太平洋地域というところ、たとえばマヤ文明、アンデス文明、あるいはマオリの人々、東南アジアのクメールの人々、こういった人々とわれわれ日本人はきっと仲よくできます。15世紀にスペイン人が侵略してくる前にこれらの地域で暮らしていた人々の世界観とわれわれ日本人の世界観は非常によく似ているのです。でも、これらの国の人々は、仲よくすると言っても貧しい国ばかりだから、国際的にあまり大きな力にはならないですね。この点をこれからどうするかですよ。

これらの国々の文明はお互いに共通しています。これらの環太平洋には地域では、みんな山を崇拝しているのですから。たとえば、ピラミッドは山のシンボルなのです。われわれが富士山を崇拝するのと同じように、マヤの人々も山を崇拝したわけです。

それから、コロンビアのティエラデンドロという遺跡では、山の上にお墓があるのです。これが世界遺産

なのです。何でこんな高いところにお墓をつくったのかというと、ここまで上がらないとこの山が見えないのです。その山を崇拝するためにここにお墓をつくっているわけです。

稲作漁撈民にとって山というものは、天地を結合している岩のはしごなのです。会津磐梯山の磐梯では、徳一大師がその下に山岳信仰の拠点をつくったのですが、山とは天地をつなぐ岩の梯子ですよ。また、鳥も天地を往来しますし、柱も天地をつなぐので、山を崇拝するのと同じわけです。

たとえば、日本の神道柱では、「心の御柱」というものがあるでしょう。もちろん諏訪大社の「御柱」もみんな同じですよ。また、中国のミャオ族の人々は、柱を立てて、その上に鳥を置くわけです。そして、アメリカ・インディアンのネイティブアメリカンの集落では、鳥等をデザインしたトーテム・ポールという柱をつくっているでしょう。そういう共通した世界観がこの環太平洋の人と東南アジアにはいっぱいあります。だからわれわれがもし仲よくするとすれば、この環太平洋の人々と、あとはアフリカの人と仲よくできるのではないかと思います。

【宮本】 ありがとうございます。

それも含めて、ここは船越さんにご質問いただきたいなと思います。

【船越】 船越と申します。

関連するお話ですが、欧米においても環境倫理学的ように、人間中心主義からの反省において、自然に生存権があるべきだという問題が活発に議論されておるかと思うのですが、特に先進国でそういう話が盛んにやられているので、先進国間であれば洋の東西を問わず、アニミズム的な環境価値観というものも共有化できるのではないのかと、ちょっと楽観主義的な考えですが、思っております。

【安田先生】 欧米の社会も、だんだんとアニミズムに近くなってきていますよね。でも基本は一神教ですから、自然と人間とは別の階級であるという世界観がありま



船越誠氏

す。さっき言ったみたいに神様がいて、人間がいて、自然がいる、こういうヒエラルキーがあるわけです。ただし、そうした欧米社会の中から、ディープ・エコロジストのような人々は、自然と人間は一体だという日本人に近いような感覚を持ってきつつあります。でもそれはまだ一部の人です。日本人は、さっき言ったみたいに、大木を見たらしめ縄を巻くわけですから。それに対しておかしいと思わないわけですよ。ところがアメリカ人は、大木があったら、そこに穴を掘ってトンネルをつくってしまうわけです。だから、欧米との価値観の共有は、実際には難しいのではないかなと思います。

【船越】 もうひとつ質問させていただけますか。日本でも、私自身は「となりのトトロ」の森の近くで生まれ育ったので、ある程度自然と接してきた経験があるのですが、私の子どもたちも含めて、都市で生まれて都市で育つ人たちが今後もどんどんふえていくと思われるんですが、自然に触れ合う機会がどんどん少なくなっていくのではないのでしょうか。そうするとアニミズム的な価値観がまったく理解できない人がだんだんふえていってしまうのではないかと考えられます。お伺いしたいのは、そういう日本の伝統的な価値観を維持、復活させていくためには教育というのが非常に重要なかなと思うのですが、先生は、どの年代へのどのような教育が一番効果的と思われますか。

【安田先生】 自然教育の効果があるのは、幼稚園から小学校ぐらいまでです。でも、皆さんのよう大人も農山漁村に行って、田植えをやったり、稲刈りをしたりして、肌で感じることで、それがいかに重労働かということが分かると思います。特に東京の人にはぜひそれを体感してもらいたいと思いますね。

僕らが子どもの時よりも今の子どもたちは環境教育がよく行き届いているから、今の子どもたちは環境に対してものすごく見る目があります。僕は「オーライ! ニッポン」というプロジェクトをやっているのですが、これは、東京の子どもたちを田舎の農村に連れていって、おじいさんやおばあさんのところへ預けるという、都市と農村の交流の事業です。子どもたちは、最初の3日ぐらいは慣れないから、ぽっとうん便所は汚いとか、嫌だとか言うのですが、それが4日目ぐらいになったら、パッと慣れてくるのです。そしたら、帰るときには「帰りたくない」とか「おばあさんがつくってくれた弁当が本当の弁当だ」とか「学校の給食は弁当じゃない」とか言い出すのです。だから、都会の子どもだからといってそうばかにしちゃいけないで、子どもたちの感受性は実は鋭いのです。そういう子どもたちに自然と触れ合うチャンスを与えることが、われわれの役目だと思います。

みなさんの家庭でも、お子さんたちを田舎にたびたび連れて行くなり、あるいは田舎に里子に出すとか、子どもたちが自然と触れ合えるチャンスを与えなければいけないと思います。子どもたちはものすごく感受性が高いから、一発でパッとそれが分かるのです。でも、チャンスを与えないとだめなのです。こんな都会の中でばかり育ったら、ろくな子に育たないですよ。

もちろん都会で教育してもいいけれども、休日には田舎のおばあちゃんのところに行ってちょっと過ごそうとか、自然と触れ合えるチャンスを与えないといけないと思います。そのために田舎があるのですから。

【船越】 同感です。ありがとうございます。

【安田先生】 ところで、張さんは中国人ですか。



張寅鋒氏

【張】 そうです。ちなみに先ほど先生のアンケートで、コンクリートと森のどちらを選択しますかと言われましたたけれど、私は森です。

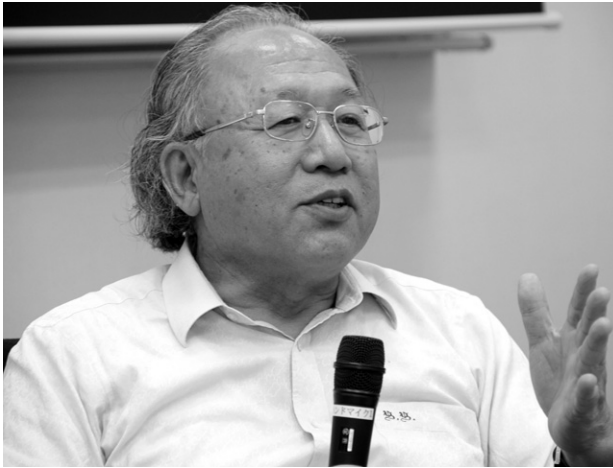
私が生まれ町は大きくないのですが、子どものときも農作業とか、小学校のときも木を植えたりしていました。そういう活動をやってきたので、結構森や緑が好きです。なぜ日本に残りたいかという、日本は自然や緑が多くて、水もおいしく、生活もすごく便利であるというのが大きな理由のひとつです。

【安田先生】 張さんは中国のどこの出身ですか。

【張】 中国の河南省というところですよ。先生が一番仲よくしてほしくないという黄河文明のところですよ。

【安田先生】 仲よくしてほしくないというより、考え方が違うということだけです。

【張】 これは冗談ですが。先生にお伺いしたい質問は、船越さんの質問の中でたとえば50年後、100年後の社会はどうなっているか。今われわれがテレビで見ている未来の社会だったら、コンクリートしかないような映画とか出ているのですけれども、そうじゃないケースもあると思います。もし50年後、100年後から今の社会を見るときに、私たちや年配の方、若い世代の一人ひとりが何をすべきでしょうか。そういうコンクリートの社会にならないように、森の社会になるために、一人ひとりが何をすべきでしょうか。先生のお考えをお伺いしたいです。



安田喜憲先生

【安田先生】 お金よりも、生きとし生けるものの命が輝く世界がきてほしい、と一人ひとりが思うことが大事です。実は、稲盛和夫先生の哲学を最も評価しているのは中国人なのです。たとえば、今般、中国でストライキや暴動があったでしょう。ところが中国の京セラではストライキなどはひとつもなかったのです。また、中国では「稲盛スクール」がものすごく広がっています。それは中国の人々が、稲盛先生のフィロソフィーの重要性を分かっているからです。むしろ、稲盛先生のフィロソフィーの価値を分かっているのは日本人です。これからはいくら日本が頑張っても世界はなかなか変えられないけど、中国の人が変われば世界が変わりますからね。もちろん、おっしゃるように、中国でも金もうけしか関心がないという人がいると思いますが、でも多くの人々がちゃんとしたフィロソフィーのうえで経済発展をしなければいけないと思います。

人々の幸せというのは何か、というと、やはり一人ひとりの幸せが大事であるし、自然を守りながら行くということが大事だということに、中国の人々も今気づき始めているのです。だから、張さんみたいに日本で働いている人が、中国と日本のパイプ役になるべきなのです。今までは中国は男社会で、日本は女社会だから、相入れないのだと思い込んでいましたが、これからはそうならないようにしなければいけないと思いま

す。張さんの役割は大きいと思いますよ。

【張】 私みたいな人間には責任が重いと感じますが、その理想に向かって頑張りたいと思います。

今の先生のお話ですと、別に中国人だろうが、日本人だろうが、世界のどこの人だろうが一人ひとりが環境を正しく認識して、そのひとつの目標に向かって頑張っていくという話だと思います。

【安田先生】 中国人と日本人でも、話せば分かるのです。張さんみたいな人がだんだん中国はふえてきていると思いますよ。

【張】 私はどっちかといったら一般的な人間かなと思っています。ただ私が思っているのは、中国は何で今そういう問題になっているかということ、国民に与えられる情報が少ないため、与えられる情報がふえてきたら変わっていくと思っています。先生がおっしゃるように中国も環境問題が起こっていて、中国の中で環境問題だけでなく、生活の問題、金の問題が起こっています。なおかつ中国だけの問題ではなく、日本等の近隣国にも問題を拡散させているのが現状です。先生は専門家として、中国の政府に一言おっしゃりたいとしたら、これをまずやってほしいということは何でしょうか。

【安田先生】 それは、共産主義はやめた方が良い、ということですよ。

共産主義である以上、中国には限界があると思います。それは共産主義が人の幸せを考えていないからです。アメーバ経営と同じで、中国においても末端の国民一人ひとりまでが中国という国を大事にして、中国のために頑張ろうという気が起きるようにしないといけないにもかかわらず、国のリーダーが自分の国が信用できないからといって、アメリカに巨額の貯金をするとか、そんなことではいけない。リーダーが自分の国を信用できないようではどうしようもない。それは人として道が外れていると思いますし、そんな国は長続きしないと僕は思いますよ。そんな国のために誰が働くのですか。いくら経済発展していても、共産主



上野裕子氏

義である限り、僕は長続きしないと思いますね。

もっとも、資本主義にも大きな問題があるわけですから、資本主義に変わる必要はないのです。だから、資本主義と共産主義の間で新しいシステムを上手につくってほしいということです。中国人ならできると僕は思いますよ。

【張】 それが変わればすごくいいかもしれませんが、ただ私から見たら、まだ遠いかなという感じがします。環境問題の観点から見ると、先生が言うように一人ひとりがとりあえず木を植えてくださいとか、何とかしないといけないという中で、たとえば日本から先進技術を入れたり、先生のような専門家が行って指導したりするような国際的な交流や支援があればいいかなと思います。先生はどう思われますか。

【安田先生】 僕は、何回か内モンゴルに行って、植林もしています。最初に内モンゴルに植林に行ったときに、現地の中国人に「どうして木を植えたいの」と質問されたのです。こう聞かれて、そんな質問がくるとは思わなかったから、僕は一瞬驚きましたよ。それで僕は一瞬たじろいで考えたわけですよ。木を植える理由は、さっき言った棚田をつくる精神と同じですよ。ほっといたら使い物にならない不毛の大地に自分のエネルギーを投入して、これを豊かな大地に変えることが日本人にとっては大きな喜びなのです。そのことを中国人にも分かってもらいたいと僕は思いました。だからそ

のことを僕は説明しましたよ。それが分かってくれたからか、今では中国の人が率先して内モンゴルで一生懸命に植林しています。

こういう木を植える喜びというのは、お金を稼ぐ活動だけでは分からないことなのです。それを世界の人々にも分かってもらいたいと思います。中国の人にもそれが分かってもらえると、世界はもっと幸せになりますよね。

日本は世界にその模範を示していかなければいけないと思います。美しい自然と共存する社会の姿を世界に示していないといけないわけですよ。ですから、高さ15mの巨大なコンクリートの防波堤をつくれば、建設会社の人は一時的に潤うかもしれないけど、日本の自然を台なしにするようなことになるので、世界に対してとても恥ずかしいことなのです。自然と共生しながら、しかも経済成長を成し遂げているという模範を示すのが日本の役割でしょう。

【小松】 あえてなんですけれども、先生が示していた環太平洋文明圏等を見ても、莫大な人口を養っているような大陸諸国は入っていないような気がするんです。たとえば中国でしたら強権的に抑えないとばらばらになるという可能性もあるんじゃないか。そういう中で稲作漁労文明の価値観が、大きな人口のある固まりをうまく導ける論理になり得るんだろうか、どうかなというのが今お話を聞いていて思いました。

【安田先生】 今までの世界の歴史は、稲作漁撈民がやられっぱなしで、やり返した歴史はないのですよ。今までの歴史は負け戦ばかりですよ。勝った経験は一度もありません。ただし、市場原理主義に対して「ノー」と言って突きつけることができるキーワードは「環境問題」じゃないかなと思います。現在の環境問題を転換点として、やり返すことができなかったら、人類はこのまま滅亡する方向へ行くのかもしれないですね。でも、中国の一部の人々は環境問題に目を開いてきていますよね。アメリカでも多くの人々が環境問題を言い始めています。

【上野】 ただ今先生がおっしゃった世界に示すという話に関係するのですが、巖流塾でも、日本では、人間が自然の上だという考えではなく自然と共生するという考え方があることや、西洋のような階級支配ではなく関係性の中に個があり個人主義ではないということなどをいろいろと勉強してきました。そして、いつも、こうした日本の良いところを世界に訴えていきたいという結論になるのですが、世界に示すにはどうしたらいいのか、世界の人に日本の良さを理解してもらうにはどうしたらいいのか、いつも結論が出ないで困っています。先生の本の中にも、西洋の階級支配の文明、近代文明が全世界、全人類を覆い尽くして、階級主義の前提にある闘争と支配が、今までの日本の平等主義や共存を壊しているところがあると書かれていますが、それをもとに戻し、日本の持つ価値を新たに世界に広めるには何をしていけばいいのでしょうか。

【安田先生】 たとえば、中世には最澄や空海が出て新しい時代をつくっていったわけだけれども、この時代には病気を治すとか、死んだらどうなるかとか、地獄や極楽とか、そういうことが人々の関心の対象でした。

一方、現代は市場原理主義の社会でしょう。ですから、現代の社会にわれわれの哲学を生かすことができるのは、市場原理主義の中で活動する企業だと思います。企業のあり方を通じて、伝統的な日本人の稲作漁撈社会の世界観に立脚して会社を運営すると、実はもうかっていくのだよ、という実例を見せることが必要です。つまりそれが稲盛和夫先生の京セラという会社なのです。だから、「盛和塾」に世界中からどんどん人が入っているわけです。一方的に利潤を上げるという従来の畑作牧畜型の資本主義の経済原理だけで、人間の幸せを犠牲にして金もうけだけに走っていくのではなくて、人間の幸せも、生き方も、命も大事にしながらやっていっても十分やっていける、という新しい未来を示しているのです。しかも、そちらの方がひょっとしたらもっといいかもしれないと多くの人が考えるようになったら、きっと社会は変わると思うのです。



芝沼美和氏

そこに僕はかけているわけです。今、その芽が出てきたところですよ。しかも、稲盛先生のフィロソフィーが、KDDIをつくり、JALも見事に建て直したわけです。

逆に、何でパナソニックがおかしくなったのかといえば、松下幸之助さんの考えが古いと言って、会社の名前まで変えてしまったので、おかしくなっていたのです。それが全部失敗のもとですよ。もしも松下哲学をそのままずっとやっておれば、今でもナショナルは元気なはずですよ。

あなたがたはこれからの日本をリードしていく人たちのだから、ぜひこのことを心にとめておいてもらいたいと思います。

【芝沼】 質問ではないんですが、先生のお話を伺って一なるほどと思ったことがたくさんあります。私は研修をやっている事業部におりまして、いろいろな研修を運営しています。そういう中で課長職以上の方の研修を見ていますと、いろいろな職場でメンタルヘルスを患う社員の方がすごくふえていて、部下が休職して困るみたいな話が必ず出てきます。それで私も気になって調べてみたら、あるメンタルヘルスの専門家の先生の記事に、植物を育てたりすることが非常に効くということが書いてあって、なるほどと思ったんです。それと今の先生の本を植えることですごく和やかになったというお話が符合して、私どもの研修事業部も、こういう教室の中だけで研修をやっているんですが、

いつかそういう山に行くような研修なんかもできたらいいなと思った次第です。

【安田先生】 宮脇昭先生は85歳になった今も一生懸命に植林されており、累計で4,000万本もの木を植えているそうです。この宮脇先生があるとき、お父さんとお母さんが津波でさらわれて亡くなって孤児になってしまい、それ以降一度も笑ったことがない女の子に木を植えさせたのです。そうしたら、木を植えて10本目ぐらいに、その女の子が初めて笑ったそうなのです。僕はその写真を見せてもらいました。やはり、僕は木を植えるということは、植物の命と触れるということであり、生きとし生けるものとともに生きるということが人間の命を輝かせることなのだと思います。

逆に言うと、現代社会の問題とは、人間の命だけを輝かせようと思って、金もうけ等をしているということなのです。ところが、人間の命だけを輝かせようと思っても、それだけでは輝かないのです。カエルも、トンビも、タカも、蚊に至るまで、人間の周りの生きとし生けるものの命が輝いて初めて、人間の命も輝くのです。それが日本人の哲学なのです。しかし、それを潰しているのが今の日本の社会なのです。

中国はかつて国土の80%が森で覆われていましたが、今は森が16%あるかないかという状態です。このように自然を破壊するということが、いつかは自分たちにしっぺ返しが来るということについて、中国の人

も今はそういうことがよく分かってきています。だから環境問題に対してもものすごく敏感になっているのです。

そして、21世紀は中国の時代だから、中国の責任は国際的にも大きいわけです。中国が日本的な要素のいいところを取り入れてくれて、そして階級社会ではなくて、みんなが幸せになれるような社会になって、自然も守りながら経済活動をやってくれたら、アジアの尊敬される国になると思います。

【張】 今日の先生のお話は、中国だけではなくに東南アジアのいろいろなところで話されたらとてもいいと思います。

【安田先生】 ありがとうございます。

【美濃地】 きょう大阪から来たんですけども、おそくなりました。先生のお話はほとんど聞けてなくて申しわけありません。私は島根県の益田という田舎の出身で、今はずっと大阪で暮らしているんです。そういう意味で言うと、おっしゃったように家もマンションですし、虫とか何かも含めてほとんど自然と隔絶されたような中で、非常に利便性の高い生活を送っていることに何となく違和感を感じているんですけども、自分とか妻とか子どもとかはそういうものにまったく違和感を感じなくて、そうじゃないところに住めないという状態になっていることに懸念を感じています。

【安田先生】 それはお父さんの教育が悪いですね。

【美濃地】 忙しくて家に帰ってないんですよ。

【安田先生】 それはだめですよ。子どもたちを田舎に連れて行きなさいというのがさっきの結論だったのですから。少なくとも土日とかには、自分も行けなくてもいいけど、子どもさんたちだけでも、田舎におじいさんとか、おばあさんに預けたらどうですか。

【美濃地】 実家と折り合いが悪くてなかなか帰れないんですが。

【安田先生】 実家との折り合いの悪いのも、都心のマンションに住んでいるからですよ。おじいさんやおばあさんは孫だけはかわいいから、あなたも奥さんも行か





美濃地研一氏

なくていいので、孫だけ行かせたらいいでしょう。夏休みには島根の田舎で1ヵ月過ごしてきたら、子どもさんたちはガラッと変わりますよ。変わるの、今しかないですよ。子どもたちが大学生になってから田舎に帰ろうとしてもなかなか難しいですよ。お子さんは今は小学生ですか。

【美濃地】 もう中学校です。

【安田先生】 中学生だったら、まだ大丈夫ですよ。受験勉強ばかりしているのではなくて、田舎に行ってこいと言うことが大事ですよ。子どもが小さいときに自然との接触を教えないとだめですよ。あなたの家庭でも、生きとし生けるものに支えられる家庭をつくらないとだめですよ。そして、やはり実家とはちゃんと折り合いをつけるべきですね。折り合いがつかないということ自体がもう危機が始まっているわけです。もう夏休みは始まっているでしょう。あなたは仕事があるから行けないでしょうから、子どもたちだけ、おじいさん、おばあさんのところへ行っていてこいと送り出すことが本当に大事なのです。子どもさんたちの未来を考えたときに、あの中学生のときに1ヵ月、田舎に行っていたから今日があるのだと、後で必ず感謝されますよ。

人が生きるということは、自分の命だけで生きるわけではないのです。生きとし生けるものの命をいただかないと生きられないのだから、生きとし生けるものととともに生きるという、その大地の豊かさというも

のを、小さいときに頭や体の中にたたき込んでおかないと、大きくなってから根無し草になってしまうのです。そういうことを、あなた自身は田舎で育ったから経験しているでしょうけれど、子どもたちは経験していないわけですからね。そして、大地に根を張ってないと力強く生きられないので、何か問題があったときにパタッと倒れたり、メンタルを病んだりする人が多くなってくるのです。それは生きとし生けるものとともに関係していないからなのです。

これは子どもさんたちの未来のために言っているのですよ。子どもさんたちが力強く未来を生き抜いて、70歳、80歳という人生を全うするためには、今のうちに生きとし生けるものとともに生きるということのダイナミズム、それを体にたたき込まないと生きる力はわいてこないのですよ。うそじゃないですよ。マンションにずっと閉じ込めておったらあかんのです。塾に通わしたらあかんのです。田舎のおじいさん、おばあさんのところへ行行って遊んでくるのです。それはすぐ実行した方がいいと思います。できないと、あなたのお子さんたちの未来は暗いかもしれないですよ。

人生は長いだから、目の前の5年、10年じゃないんだから、50年先を見たら、1ヵ月なんてほんの短い時間じゃないですか。それが将来、お子さんたちがどんな人生を送るのかということと深く関係しているのですよ。

【美濃地】 妻と相談します。ありがとうございました。

【安田先生】 奥さんの意見が強そうだから、それをあなたがどう説得できるかがカギですね。

【宮本】 ありがとうございます。このペースでお話を伺っていたら、朝まで続いてしまうような感じですので、ここでいったんお開きにさせていただきます。安田先生、どうもありがとうございました。